

# 一九五一年の台湾表象

— 黄靈芝の日本語小説「輿論」 —

下岡友加

## はじめに

黄靈芝（一九二八—）は台南市に生まれた作家、彫刻家である。日本統治下の台湾で十七歳まで日本語教育を受けた彼は、今日までに俳句、短歌、小説、評論、童話など幅広いジャンルに渡る日本語作品を書きあげてきた。編著に『台北俳句集』全三九集（一九七一〜二〇一一）が、単著に『黄靈芝作品集』全二一巻（一九七一〜二〇〇八）等があり、創立当初（一九七〇）から現在に至るまで、四十年あまり台北俳句会の主宰をつとめている。

黄の著作の一部は、日本でも公刊されている。国江春菁著・岡崎郁子編『宋王之印』<sup>(1)</sup>（慶友社、二〇〇二・二）、黄靈芝『台湾俳句歳時記』（言叢社、二〇〇三・四）<sup>(2)</sup>、黄靈芝著・下岡友加編『戦後台湾の日本語文学 黄靈芝小説選』（溪水社、二〇一二・六）である。ただし、その他の創作は部数の限られた作品集（非売品）に収められており、彼の文学営為全般についての研究は、未だ途についたばかりと言える。<sup>(3)</sup> 本稿で扱う「輿論」<sup>(4)</sup>（初出）<sup>(5)</sup>「輿論—民主までの努力の蔭に—」<sup>(6)</sup>『黄靈芝作品集 卷九』一九八三・一一）は、一九五一年に台湾で発生したバラバラ殺人事件が、国家的大問題と化していくまでの顛末を物語る小説である。そこには中国共産党との戦時下にある台湾社会の様相や、

国民党独裁政権に対する民衆の不満と不信、さらには一兵隊として台湾へ渡ってきた外省人の立場などが描き込まれている。これまでに発表された黄の小説三一編の中でも、とりわけ戦後の台湾という地域に独自の素材を取り扱った作品と言える。

「輿論」に関する先行研究は岡崎郁子の論考<sup>(7)</sup>を除けば、皆無である。まずは小説における台湾表象（＝地域性）の具体を確認した上で、そのローカルな事象を普遍的なテーマへと昇華する小説の方法について明らかにし、黄文学評価の一助としたい。なお、以下の小説本文の引用は最も新しい稿である、『戦後台湾の日本語文学 黄靈芝小説選』に拠った。

## 一 一九五一年の台湾表象

### 1. 未だ終わらぬ戦争

小説全十三章の物語内容は次の通りである。

民国四十年（一九五一年）の夏、台北の堀川<sup>(8)</sup>で、一人の女性のバラバラ死体が発見された。警察は新聞を通じて死体の特徴を公表するが、被害者を特定することができない。捜査は二転三転し、最終的には政府高官（陸軍大将）を岳父に持つ人物に容疑がかかるが、その直後、

事件の情報は非公開となる。身内への容疑を隠蔽するかのような政府の態度に人々は強い不満を持つ。民衆の声を代弁するように、民報紙は政府を批判し、政府機関紙はそれに反駁する。ジャーナリズムの対立によって、事件に対する世間の関心はさらにおおられたが、真犯人として逮捕されたのは右の政府高官を岳父に持つ人物ではなく、日雇い仕事をする元兵隊の男・春福であった。春福は妻を殺害したという罪だけでなく、社会を攪乱した罪に問われ、逮捕後わずか一ヶ月で処刑された。

「輿論」の主要人物は皆、いずれも戦争や軍隊と関わりを持つ者として登場している。春福は元兵隊であり、春福の妻・富妹も、かつて「軍の福利社」(一)括弧内の数字は章番号をあらわす。以下同様)で働いていた。また、富妹の浮気相手であった倪という人物も元兵隊である。春福は「以前軍隊にいた頃の仲間だった周」(二)の依頼で、倪の就職を世話した。

また、容疑者としてはじめに名前があがった人物は、「劉と呼ぶ兵隊上がりの無職者」(三)であった。さらに陳という人物は、「除隊するはずだった長男が折悪しく台湾海峡の戦雲のため除隊延期になつ」(六)のため、息子のために用意した家を劉に貸したという。

そして、政府高官を岳父に持つ容疑者・胡秀辛も、軍令部に勤務する陸軍中佐であった。政府高官の岳父自身も有名な陸軍大将である。死体遺棄容疑がかけられた胡家の傭人二人もそろって、元軍人であった。さらに付け加えれば、川に浮かんでいた包みを開けて、最初に死体を発見したのも「年若い兵隊」(二)である。

このように、小説は一九五一年の台湾社会の日常が、戦争・軍・兵

隊の深く浸透した場所に他ならないことを、その配役によって端的にあらわしている。何より真犯人・春福の犯行自体に、彼の戦争体験の影がある。春福は小説冒頭では「十五の時に戦争へ刈り出され、一昨年除隊するまで、かっきり十年間軍隊にいたとは思えない弱々しい青年」(二)として登場するが、実際には妻を殺害し、しかも切断して遺棄した。この彼の二面性、ギャップについて小説は次のように語っている。

(…)一見したところ神経が細いようでありながら、事実はかなりに凶太いところもあったようである。第一、富妹をばらばらにする間、彼は丸二日も屍体とともにいたのだった。こういう神経は、あるいは多感であるべき少年時代を戦争に駆り出され、酷たらしい中に送ったことが作用しているのかも知れない。

(十一) 傍線は下岡が私に付した。以下同様)

右のように犯人・春福の行為や性質に戦争の影響が見られる上、事件の捜査も未だ戦時下にあるような、台湾の社会状況によって難航する。警察に届けられた失踪人の数は「三十八名」(三)↓「六十七名」(四)↓「百二名」(五)と日毎に増えていく。また、死体発見現場付近は「終戦後、大陸の赤化に伴う難民の移住によって人口が密集し、瞬く間にでき上がった界限」で、「疑い出せばどの一軒も臭い」(三)のである。

捜査の実権はやがて警察から軍の機関に移されるが、それは容疑者がいずれも軍籍にあり、また目下中国共産党との戦時中であるため、

社会にこれ以上の混乱を招くことはできないという口実に基づいていた。さらに、春福は元兵隊であるという理由から、軍法に訴えられて処刑される。

以上のように、小説は十年に渡る兵隊経験を持つ一人の男の犯罪を軸として、未だ戦争の影の色濃い、不穏な台湾社会を浮かび上がらせている。次に、そこに生きる人々の心情の描かれ方を見る。

## 2. 代理闘争するジャーナリズム

早い段階で被害者を割り出すことができなかつた警察は、全島の新聞に「薄目を開けた薄気味の悪い被害者の写真」(四)を掲載した。「被害者はなかなかの美人」であり、かつ「年若く、しかも事件が暗礁に乗りかかっているという同情心や好奇心」から、世間の耳目を集める。

捜査の迷走を横目に、大衆雑誌が勝手に犯人を作り上げて売り上げを伸ばす中、民報紙は「戸政が徹底していないから、人が死んでも身元がわからないのだ。大体失踪人が百人もいるとは何たることか」

(六)と政府や警察を攻撃しはじめた。反対に政府の機関紙S紙とC紙は、警察の捜査を称えて援護する。民報紙と政府機関紙との対立は、容疑が胡秀幸にかかったことを契機として一層激しさを増す。民報紙は、S紙とC紙が発表しなかつた事実、すなわち胡の岳父が国民政府国策顧問・陸軍大将の唐克敏であることを暴露した。その結果、世間の人々は「犯人が政府高官の一族なればこそ、あのように被害者は身元さえ不明たり得たのだ」(七)と事件の真相を了解する。

人々の疑いは、胡に嫌疑がかかった直後の政府の一連の行動(警察から警備司令部へと捜査実権を回し、事件に関する一切が報道されな

くなつたこと)により、さらに確信的なものへと変わる。そして、官権の目を盗むように、台湾全島にはある噂が広まった。被害者は胡に囲われていた愛人であり、その存在を知つた妻が、嫉妬心から愛人に手をかけたという噂である。さらに、その愛人と考えられる女性と、密かに付き合つていたという大学生が現れ、彼女の失踪を訴えた。大学生の涙ながらの告白の一部始終を掲載した民報紙は、胡を犯人と疑う世間から喝采を浴びる。

真犯人・春福が捕まつた後、民報紙の二人の中堅社員は自分たちのあやまちを省みながら、次のように会話した。

——大変なことになつたな。

——ああ、筆が滑り過ぎたようだ。

——我が社は大丈夫か。

——社長を更迭せねば治まるまい。

——しかし言論は自由なんだ。社としては世論をとり上げたに過ぎない。

——そう、新聞はあるいは輿論を投げることはできるかも知れない。が、輿論を育てるのは常に民衆だ。罪は民衆にあつて我が社にはない。あるいは民衆に罪を犯させる「動機」の中にこそ罪があつたというべきであらう。(十三)

右で語られる「民衆に罪を犯させる「動機」とは一体何か。事件によつて民衆が警察や政府、体制側に対する不満を募らせたというより、もともと民衆に抱かれていた体制側への不満が、この事件を契機

として噴出したという意味に了解しうる発言であろう。小説が作品の背景として設定した一九五一年とは、二・二八事件（一九四七年）、戒厳令施行（一九四九年）後も横行する、政府による苛烈な民衆弾圧（白色テロ）の時代の最中であつた。

「罪は民衆にあつて我が社にはない」と逃げを打つ民報紙にも、民衆に迎合し、いたずらに反政府感情をおおつたポピュリズムの罪が存する。しかし、一殺人事件がジャーナリズムを代理人として、政府と一般民衆の闘争へとすり変わる背景には、日常的に抑圧された人々の生活感情が前提として存在しなければならぬ。

春福が処刑された後も、彼を「架空の人物であると主張する人が絶えぬ」（十三）かつた。何故なら、人々は春福が逮捕される以前から、「真実の犯人は見つからないのではなく、司令部が逆にそれを庇い立てて」おり、「そのうちに必ずや或る架空の人物をでっち上げて、それに罪を転嫁することであろう」（十）といった予見を持っていたからである。春福の逮捕と処刑とは、そうした民衆の予想通りの顛末に他ならず、もはや政府に対する信頼など微塵も残されていない社会がここにはある。

## 二 居場所のない男・春福——外省人の悲哀

不穏な社会状況、そこに生きる人々の政府に対する不信に加えて、「輿論」は、戦後国民党とともに台湾へ渡ってきた外省人が、いかなる場所に置かれていたかを物語る小説でもある。

春福の孤独な立場については、「広東人の彼にとつて台湾にいる親類縁者といえ、台湾人の妻の里家しかなかった」（二）と小説冒頭

で明かされている。彼は妻の富妹と口争いをする、その度に、台北から岳父のいる台湾中南部・嘉義にやってきては慰められている。岳父は「本当は誰も兵隊なんか、しかも外省人に娘をやりたがらないのが普通なのだ。兵隊は人を殺したり殺されたりするのが商売だし、また外省人は戦争が終われば大陸へ戻ってしまうからだ」（一）と本音を漏らしているが、それでも娘の富妹を春福に嫁がせたのは、身持ちの悪い娘の「厄介払いができると思つたから」（二）だという。

ところが、予想に反し、外省人・兵隊の春福はまじめな青年であつた。岳父は実の娘である富妹を「悪い娘」「女ごろつき」（一）とこき下ろす一方、対照的に春福を「実直な好い青年」「あんたは人がいい」（二）と評価し、富妹と別れて、その妹である恵美と再婚することすら春福に勧めている。

しかし、春福は岳父の進言を意に介さず、台北へと戻る。そして、一人娘の美々を連れて家を出ていこうとする富妹と次のように諍いとなり、彼女を殺してしまう。

（…）富妹は目の覚めた美々にこういった。

——さあ、母ちゃんが好い所へ連れて行って上げる。

そして何時買つて来たのか、新しい洋服を美々に着せかけ始めた。（…）

——おい、何処へ行くの、聞いて聞いているんだ！

春福が声を荒げると、彼女は取り済まして答えた。

——わたしの家へ行くのさ。

そして鼻の先でふふんと笑つた。

……それから美々を奪つての掴み合いの喧嘩が始まった。(十一)

殺される直前、富妹は自身の行き先を「好い所」「わたしの家」と語っているが、果たして、それはどこを指していたのだろうか。日備いのわずかな稼ぎしかない春福は、「妻を満足させ得るほど金を渡したことがないことに、劣等感をもっていた」(一)。そのことからすれば、富妹の「わたしの家へ行く」という主張は、春福のプライドを深く傷つけるものだったはずである。春福にとつて「妻の浮気はもう慣れっこ」(二)になるほどの日常であつた。しかし、妻が自分だけでなく、娘を連れて家を出て行つてしまえば、春福の台湾で生きる縁は根底から奪われてしまう。嘉義での別れ際、富妹の妹である恵美は泣きながら、「義兄さん、あんた可哀想……」(一)と春福に対する同情心を隠さなかつた。また、美々をあずかつてくれた家主の奥さんは「細君のいない春福を気の毒そうに」(十一)見つめていた。酷な言い方をすれば、春福は浮気ばかりする細君と幼い娘を持っているからこそ、哀れまれ、同情を受けうる立場にあつた。そして、そのことが彼の居場所を保証していたのである。春福は娘への愛情、妻への嫉妬ゆえというだけでなく、彼は彼自身の必要から娘を取り合い、妻を殺めたというべきであろう。

このように居場所のない外省人の姿は、国民党ともに台湾へ渡つてきた「下つ端の兵隊」(二)の表象として、一つの典型と言える<sup>(1)</sup>。妻の実家以外に確たる居場所のない春福を生み出した根本原因、その契機は疑いなく、国民党政権の台湾移転である。しかし、そのような政治を主導した政府は何一つ責任を取ることなく、春福を断罪し、切り

捨てる。小説中、春福の寄る辺ない立場は、容疑のかかつた胡秀幸との対比により、一層際立たされている。小説はそれぞれの岳父の存在について明らかにしているが、国民党の功績者であり、著名な軍人である岳父を持つ胡への警察の対応は、いかにも慎重である。一方、春福は優しく親切な台湾人の岳父を持つが、嘉義で細々と暮らす岳父に春福を庇いきる力はない。ましてや春福が真犯人であればなおさらであり、部屋に盗聴器を仕掛けられた春福はそれとは知らず、妻が既に死んでいることを示唆する言葉を発する。同じ外省人であっても、特別な地位にある胡秀幸のような者と、春福のような何ら地位のない者との立場の懸隔はあまりにも大きい。

春福の妻殺しとは、十年兵隊をつとめた彼の暴力性を明かすとともに、彼の家族に対する強い執着を物語る。それは長い戦争の果てに台湾に渡つてきた、というより渡らざるを得なかつた、少なからぬ数の「下つ端の兵隊」の悲哀を代弁しているのである。

### 三 無責任なのは誰か？——輿論の担い手としての民衆

岡崎郁子は、「輿論」について「物語としてのおもしろさが読者を引きつけ、中篇だが、魅了されたまま一気に最後まで読ませる。輿論とはこんな風に作られ、こんなにも無責任なものかと考えさせられる」と評した<sup>(2)</sup>。岡崎の指摘する通り、小説が殺人事件の真相だけでなく、事件によつて発生した輿論の在りようを問いたかつたことは、掲げられたタイトル並びに小説全体の構成に明らかである。

小説の擁する十三章のうち、殺人を犯した春福について語られるのは一章と十一、十二、十三章の計四章のみである。対して二章の死体

発見から十章に至るまでの小説中盤を担う九章にわたる叙述は、すべて輿論の形成過程を追うことに費やされている。事件の犯人を勝手につくり出し、騒ぎ立てる人々の動向に「ややもすると、何だか自分と関係のない事件のような気がし出していた」(十一)と春福は感じているが、実際に彼は小説の構造上でも輿論形成の章から除外されており(いっさい語られることなく)、まさしく輿論の蚊帳の外に置かれていた。しかしながら、最終的に春福はその輿論の責任を一身に負わなければならない。小説最終章における民報社社員の言葉はそのことを端的に明かす。

——僕は思うんだ。春福は死刑にされるだろう。しかし、もし社会がこれほどに騒がなかったら、彼は同情されることだろう。悪いのは女だったのだから。何しろ親でさえが春福を庇ったほどだから。

——だから春福には罪はない。いや、彼の罪は過失による殺人と解体、遺棄だけだ。これほどの大事件にはならなかったはずだ。しかし今、彼が問われようとしている罪は、むしろ治安を乱したことではないか。彼は治安を別に乱しはしなかった。社会が勝手に乱れただけなんだ。それに彼が責を負う責任があるだろうか。

——言論は自由なるべからずか。しかし輿論は野放しでないと育つまい。

——しかし春福を殺したのは実は輿論なんだ。(十三)

輿論を形成する社会、その構成員としての民衆の愚かさや無責任は、右のようにあからさまに指摘されている。露骨なテーマ提示が行われているように見えるが、重要なのは、ここで取りあげられた、自分たちの罪に無自覚な民衆と決して遠くない場所に、読者自身も置かれるような仕掛けが、この小説には設けられているという点である。

小説は、一章において富妹が美々という子どもを既に産んでいることを読者に知らせている。ゆえに、「被害者は経産婦ではない」(三)という検屍結果から、被害者は富妹ではないと読者は判断する。ところが、五章で新たに「法医の一人が被害者の経産婦らしい旨主張し出した」という情報が与えられることにより、前の判断は揺らぐ。続く六章では犯人と話をした三輪車夫が「相手は戦後に大陸から渡って来たいわゆる外省人で、ひどい訛りをもっていた」と証言するに至り、既に一章で春福が外省人であることを知らされている読者は、彼の犯行の可能性を考えずにはいられなくなる。しかし、同じ六章では、世間に流布する「いろいろの憶測」が、推定表現を多用して、次のように語られている。

世間にはいろいろの憶測が行なわれていた。死者は台湾で殺されたのではないかも知れないという説があった。大陸沿岸から密輸のように漁船で運んで来るとしても一晩あればこと足りた。誰かが持ち込んで来たのではあるまいか。しかし何のためか——? (….) それから被害者が高砂族なのではなからうかという憶測もあった。山で殺されたということもありそうだし、都市へ稼ぎに出ていた少女なのかも知れない。(….) 高砂族、た

たとえばパイワン族などの場合、未婚の少女は耳環をつけないが、幼時から耳孔を開けておくこともないではない。

また一説によると、これには政治的な因素が含まれており、被害者は中国大陸から派遣されてきたスパイではあるまいか。そして犯人もまたスパイである。従って戸籍もなく、ために幾ら調べても身元がわからないのではなからうか。

(…) 若い夫婦が事件発生の寸前に突然引越したの、どうも奥い。隣長にしても、ペンキを塗りかえた点など、考えれば考えるほど怪しくなつて来る。(六)

小説はあくまで推定(傍線部)のかたちで断定を巧みに避けて情報を提供しつつ、引用末尾の二重傍線部のような主観的判断や疑いを挟んで、読み手の判断を攪乱する。こうして春福が犯人であるという事態以外の、様々な可能性が読者に刷り込まれた上で、続く七、八、九章では、胡秀辛への疑惑が集中的に語られる。この有力な容疑者の登場によって、読者は春福＝犯人であるとの判断を一時留保せざるを得ない。事実はようやく十一章において「犯罪の張本人、春福は内心おっかな吃驚りで事件の発展を見つめていた」とはじめて明かされるのである。

以上のような語りの誘導により、犯人像をめぐる様々な情報に翻弄される読者は、小説内でさまざまな犯人像を噂する一般民衆と、ほぼ同様の位置に置かれている。むろん読者は、一章に記された春福の情報を持つているため、小説内の民衆とは異なり、春福が犯人であるという推定を行うことが可能である。しかしながら、そうした犯人への

心当たりを持つている(持たされている)がゆえに、読者は真犯人は誰かという謎について一層熱心に考えさせられてしまうのである。

一体犯人・被害者は誰なのか? もし春福が犯人であり、被害者が富妹であるなら、彼は何故彼女を殺害したのか? また彼はいつどのようにして捕まってしまうのか? 読者は小説内の民衆同様に犯人探しをするだけでなく、春福という犯人側の立場からも、スリルと恐怖を体感することになる。一章に置かれた情報は、読者に小説を先へ先へと読み進めさせるための推進力(伏線)として機能する。そして、最初は客観的な立場から事件を眺めていたはずの読者は、様々な犯人説の飛び交う輿論形成の場のなかで、次第に小説の語り手が付与する曖昧な情報や、曖昧さを助長する語り口により、噂と憶測に右往左往する民衆ともはや殆ど変わらぬ位置に置かれていく。すなわち、読者も仮にこの小説の社会状況、渦中になれば、あやまった輿論を形成する民衆の一員になり得る可能性の中に置かれるのである。その時、先に引用した「春福を殺したのは実は輿論なんだ」という民報社社員の言葉は、単に小説中の民衆のみならず、自らの好奇心に突き動かされて犯人を想像し、小説の叙述に惑わされた読者自身にとっても、自らを省みるための一つの契機となる。

「輿論」は、犯人探しの謎に読者を巻き込むことによって、「物語」としてのおもしろさ(岡崎郁子)を形成するとともに、輿論形成者である一般民衆の責任を読者自身にも体感させる小説である。政府の力のみによって、理不尽な恐怖政治が成り立つわけではない。ここで告発されているのは、体制の暴力に知らず加担している人々の無知、無自覚、無責任である。

そして、この輿論の担い手側の責任は、一九五一年の台湾という時間空間にのみ止まる問題ではなく、未だ現代においてもアクチュアルな問題であり続けている。<sup>13)</sup>「輿論」が戒厳令施行直後の台湾という場を描きながら、ただにその模写であることを越える所以である。

### おわりに

ここで見てきた「輿論」のように、黄霊芝の小説は、読者巻き込み型のどんでん返し展開を持つものが多い。たとえば、「法」(『黄霊芝作品集 巻一』一九七一・一)は「輿論」とほぼ同形の構造に基づいている。「法」の主人公、少年・信は、許嫁にも等しい玉という少女を養父に奪われ、逆上して玉と養父を殺した。その後、信は自殺を図るが失敗し、入院する。信を裁判まで生かすため、警察は玉たちは死んでいないと虚偽の情報を彼に与える。与えられた嘘の情報から、信が生きる希望を見出した矢先、彼に死刑判決が下るといふ皮肉な結末である。信に伝えられる情報が、果たして嘘なのか本当なのか、作品末尾まで確たることは読者にも伏せられている。そのため、読者も信同様に惑わされ、彼の希望と絶望を迫体験する。信は殺人者であると同時に、あくまで法の下に人間を跪かせようとする、警察や司法の暴力の犠牲者として描かれている。

この許嫁を奪われた「法」の信と同じく、浮気ばかりする妻に裏切られ続けていたという点では、「輿論」の春福も被害者の立場に置かれている。しかし、その妻(信の場合、許嫁)を殺した時点で彼(ら)は加害者となる。そして、さらに大きな権力によって過重な罰に処せられるという点では、犠牲者とも言える。このように繰り返される反

転の構図は、被害者/加害者の区分は決して簡単になされえないこと、および一個の人間の非力と、それに対する社会や体制、法という名の暴力を浮き彫りにする。加えて「輿論」は、春福と胡秀辛のように、同じ省籍のなかでの立場の違いをも描き込んだ上、体制側の暴力だけを告発して終わるのではなく、民衆の罪をも射程に入れていくという点で、「法」よりもさらに一步踏み込んだ問題を捉えていると評価できる。そこには、同じくどんでん返し構造を持つ「蟹」(『黄霊芝作品集 巻一』や「豚」(『黄霊芝作品集 巻五』一九七三・九)のよなユーモアは見られぬものの、代わりに社会に向けられた、より先鋭的な批判がある。

「輿論」は一九五一年の台湾という限られた時空間を舞台として設定しながら、その地域の固有性に止まらぬ人間社会の本質を鋭く射抜いた、黄文学を代表する一篇である。

### 注

- (1) この本の出版により、第三回正岡子規国際俳句賞を受賞。二〇〇六年には台湾の真理大学から台湾文学作家牛津奨を受け、同年秋には「日本文化紹介に寄与した」として旭日小綬章を授与されている。黄は日本語のみならず、中国語、フランス語での創作も行っており、一九七〇年に、日本語を自身で中国語に書き直した小説「蟹」で、第一回呉濁流文学賞を受賞している。
- (2) 黄霊芝の創作全般について言及した唯一の論考として、岡崎郁子『黄霊芝物語―ある日文台湾作家の軌跡』(研文出版、二〇〇四・二)がある。

(3) ただし、『黄霊芝作品集 巻九』での発表以前に、第六回『群像』新人文学賞小説部門に投稿され、第一次予選を通過した作品であることが、一九

六三年五月『群像』誌上で確認される。

(4) 外省人とは、戦後の国民党の移転とともに中国大陸から台湾へ渡り、新たに移住した人々を指す。対して、本省人とは戦前から台湾に住む人々を指す呼称。

(5) 注2に同じ

(6) 現在の新生南路に位置した用水路。

(7) 日本の「酒保」のようなもの。兵営内や軍艦内で日用品、飲食物などを扱う売店。

(8) 事件発生現場とされている、春福の居住地・大安区は、実際に外省人の居住の割合が最も高い地区であった。若林正丈『台湾の政治 中華民國台湾化の戦後史』（東京大学出版会、二〇〇八・六）の表2―4「外省人人口が3割以上を占める郷鎮・区」に拠ると、大安区の外省人人口の比率は一九五五年末において66・5%にのぼっている。なお、若林の資料は、李棟明「居外省籍人口之組成與分布」〔『台湾文獻』第11―12合刊、一九七〇・六、表12のデータに基づき作成されたものである。〕

(9) S紙とC紙とはそれぞれ『台湾新生報』（一九四五―）と『中華日報』（一九四六―）を指すと考えられる。

(10) 唐克敏のモデルは、その経歴から薛岳（一八九六―一九九八）と考えられる。広東省樂昌出身で日中戦争時、第九戦区司令長官として長沙会戦で日本軍を撃退すること三度に及んだが、四度目の迎撃（一九四四）で長沙を失った。台湾後は総統府戦略顧問、行政院政務委員を歴任（顔平「薛岳」中国社会科学近代史研究所『民国人物伝 第十二卷』中華書局出版、二〇〇五・九 参照）。なお、黄守礼氏（元中原大学・台北工専教授）に拠れば、一九五一年夏頃に「輿論」のモデルと考えられるようなバラバラ事件が確かに

台湾で発生したという。また小説とは異なり、実際には空軍少将が殺人犯であったが、その事実は政府により隠蔽されたとの話である。黄靈芝自身も「輿論」にはモデルとなった事件があることを認めているが、現在のところ、未だその事件を特定できていない。

その他、小説中で日本から招かれたとされる解剖学者・金尾太郎のモデルは、金関丈夫（一八九七―一九八三）と考えられる。

(11) たとえば、邱永漢「長すぎた戦争」〔『講談倶楽部』一九五七・九〕邱永漢短篇小説傑作選 見えない国境線』新潮社、一九九四・一〕所収）、方方「陸軍軍曹陶多泉」〔『七十年代』一九七三・一一〕〔『彩鳳の夢 台湾現代小説選I』研文出版、一九八四・二〕所収〕等の作品が存する。その他、外省人作家の作品には故郷喪失のテーマが描かれることが多い。なお、台湾文学研究者・赤松美和子氏から、七十年代後半には『聯合報』『中国時報』の文学賞で退役軍人について描かれた小説が入賞しており、なぜ「輿論」の台湾での発表は八〇年代にまで遅れたのかとの質問を受けたが、注10のようなモデルとなった事件の真相に顧慮して、「輿論」の発表が控えられていた可能性がある。

(12) 注2に同じ

(13) たとえば、佐藤卓己『輿論と世論 日本の民意の系譜学』（新潮社、二〇〇八・九）は、一九六〇年代の日本には存した「輿論」と「世論」の違いを、「輿論は公衆の社会的意識が組織化されたものであり、世論とはまだ認識の対象となっていない心理状態、つまり気分や雰囲気の出でである」と説明する。「世間の雰囲気（世論）に流されず公的な意見（輿論）を自ら担う主体の自覚が、民主主義に不可欠」であることからすれば、「世論（せろん）」に対する「輿論（よろん）」という表記・語の復活が必要だと佐藤は説く。現代

日本では、「輿論」を担うにふさわしい主体が未だ確立されていないという問題提起を佐藤は行っている。

また、小説「輿論」のようなジャーナリズムを介した民衆の政府に対する反抗が、現実の一九五一年の台湾で果たしてどこまで可能であったかという点については疑問も存する。小説は一九五一年の台湾表象に加え、発表された一九八〇年代のジャーナリズムの動向も反映し、台湾の真の民主化に向けて輿論の是非を問うたものと位置づけることもできよう。

【付記】本稿は第13回日本台湾学会（二〇一一年五月二九日 於早稲田大学）における報告内容に加筆・訂正を施したものである。貴重な意見を賜ったコメントーターの赤松美和子氏、東呉大学文学読書会の方々、並びに小説のモデルとなった事件についてご教示下さった、黄守礼氏に御礼申し上げます。なお、本稿は科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号23720113）の助成を受けた研究成果の一部である。

（しもおか ゆか、県立広島大学准教授）